

# サンチャゴ巡礼日記

《2009年6月11日～6月30日》

カトリック池田教会 山内 敬子



## はじめに

この『サンチャゴ巡礼日記』は、池田教会の広報紙『からしだね』に 2009 年 7 月号～2010 年 9 月号にかけて掲載された私の巡礼体験記です。聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラは、スペイン北西部に位置する海辺の街です。9 世紀初頭に 12 使徒の 1 人聖ヤコブの遺骨が発見されたことから聖地とされ、今ではヨーロッパの三大巡礼地として、多くの巡礼者で街道が賑わいます。巡礼路の全長は約 800 キロですが、私はその一部を 12 日間かけて歩きました。その昔、罪人は罰として、この聖地巡礼を命ぜられることがありました。苦難の旅路をへて、罪人が聖地にたどり着くと、はめられていた足かせがかき消え、罪が赦されたといわれます。つたない文章ではありますが、巡礼の喜びが少しでも伝わり、この冊子を手にとってくださったあなたを、少しでも楽しませることができれば幸いです。

## サンチャゴ巡礼日記 1

2009 年 6 月 11 日、空港まで見送りに来てくれた友人が、バスに乗ってしまい、広い広い関西空港に取り残されたとき、私の生まれて初めての一人旅が始まりました。

去年、『サン・ジャックへの道』という映画を観てから、サンチャゴ巡礼へは、ずっと行ってみたいと思っていました。そして、今年三月に仕事を辞めたとき、よし！行こう！と決めました。やることは山ほどありました。まず、不安がる家族を説得し（これが一番大変でした（笑））、ツアー会社を探し、保険に入り、海外で使える銀行口座を作り、パスポートを更新しました。そして、リュックをはじめとした持ち物の準備を開始。それと同時進行で行ったのは猪名川の河川敷でのウォーキングでした。ズボラな私ですが、巡礼が始まれば、一日 20 キロ歩くのですから、今歩いておかないとなんだか恐ろしいことになる気がして、毎日まじめに歩いていました。

さて、飛行機は順調に飛び、オランダで乗り換え。現地時間 21 時、無事にスペインの首都、マドリードに到着しました。空港まで迎えに来てくれたのはスペイン人運転手のホセさん。ホセさんとかたことの英語でおしゃべりしながら、今回参加するツアーを主催している古村さん宅へ。古村さんがいい人で一安心。古村さんに連れられて、スペインの居酒屋、バルに始めて行き、エビや生ハムのピンチョスをごちそうになり、ぐっすり眠りました。

翌日 12 日は体力調整のため、マドリードで一日フリー。調子に乗って、散歩に出かけて道に迷い、危うく巡礼に行きそびれるところでした。



そして、13日、巡礼開始。朝七時に今回のツアーガイドの佐々木さん、一緒にツアーに参加される男性一人と待ち合わせ、タクシーでバスターミナルへ向かいました。長距離バスで、マドリードから、人口20万の街レオンへ、レオンで乗り換えて今回の徒歩巡礼開始地点、ビジャデフランカ・デル・ビエルソへ。レオンまでは荒れ野や牧草地が続くのですが、レオン以降は少しずつ林や森が現れ始めます。黄色いエニシダが丘一面を覆っていたり、野原には真っ赤なケシが咲いていて美しい眺めです。

ビジャデフランカ村に到着後、ホテルに荷物を預けて、巡礼手帳（クレデンシャル）をもらいにアルベルゲ（巡礼宿）へ。この村のアルベルゲは日本の居酒屋や木造のアスレチック施設のようで、なかなかさっぱりときれいな所でした。パスポートを見せて、必要事項を記入し、クレデンシャルを入手。一番最初のスタンプもそこで押してもらいました。



その後は近くの教会へ観光に出かけました。この教会の側面には普段は開かない免罪の門がついていて、その門の前には一本の小道が通っています。ふくよかな教会の守り番トニーニョおじさんが教えてくれたところでは、この小道を、あのアシジの聖フランシスコも通ったという言い伝えがあるんだとか。確かめようはありませんが、でも、本当にそうだったのかも。私の洗礼名がたまたまフランチェスカなのですが、イタリアからもスペインからも遠いアジアの小国に生まれた私が、イタリアに生まれた聖人にあやかた名前をもらい、今、何百年ものときを隔てて、彼も歩いたかもしれない道を歩いている。そう思うと、不思議に感慨深いものがありました。



第2回へつづく

## サンチャゴ巡礼日記2

2009年6月14日、この日から徒歩巡礼開始です。目的地は19.6キロ先のLAS HERRERIAS。朝7時に集合して朝食。8時にビジャフランカ・デル・ビエルソのホテルを出発しました。行き会う人たちは皆、ベン・カミーノと挨拶しあいます。“良い旅を”という意味です。

20キロ近い距離ではありますが、4キロごとに休憩を入れるので、それほどきつくありません。昼食は宿の二個前の村のMeson（居酒屋）にて、ボカディージョ（固いパンのサンドイッチ）を食べました。こちらの食事はとにかく何でも大きい！量が多い！！ボカディージョも私の顔より大きい、豪快な料理でした。でも、中に挟んである生ハムがとってもおいしいんです。たくさん歩いて汗をかいた体にはこの生ハムの塩気が本当にうれしい。日本では生ハムというと、サラダやメロンに乗せて、ちょっとおしゃれな食べものといった感じですが、スペインではもっと気軽に日常食として食べられています。

塩気といえば、ガイドの佐々木さんが、徒歩巡礼は塩分補給が大切だからと、炒ったごまと岩塩をすりつぶした手作りのごま塩を、休憩のたびに私たちになめさせてくれました。忘れられない巡礼の味のひとつです。

巡礼の道では、たくさんの野の花に出会います。日本で見かける植物もちらほら。でも、そこはスペイン。皆少しずつ日本のものと違い、外国人の顔をしています。真っ赤なケシ、はな色のリンドウ、ピンクの濃いカラスノエンドウ、ふたまわりほど大きいオオイヌフグリ、茎が長くて細いタンポポ。スペインで見かける植物は、全体的に日本のものよりは大きく、花の色も濃い印象です。白い花が可憐な野いちご、クローバー、れんげ草は、日本でもおなじみの顔で道端に咲いています。桜の木には、小さな小さなさくらんぼが実り、イチジクや、クルミ、栗も青い実を付け始めていました。試しに、さくらんぼを木の枝からちぎって食べてみましたが、なかなかおいしく、お腹も壊しませんでした(笑)。

15時半、LAS HERRERIASの宿に到着。シャワーを浴びてから、SNJで購入したテレホンカードで日本に電話してみました。これが、ホテルに備え付けられている公衆電話ではなかなかつながらない！何度も何度もかけ直し、



スペイン語に堪能な巡礼仲間の女性と、佐々木さんに手伝ってもらって、やっとつながりました。テレホンカードさえ購入すれば通話料無料の電話番号が使えるため、使う人が多く、回線が込み合っていたようです。なかなかつながらなかった電話ですが、相手の声ははっきりと聞こえ、受話器の向こうの家族の明るい様子にほっとし、急に肩の力が抜けたように感じました。

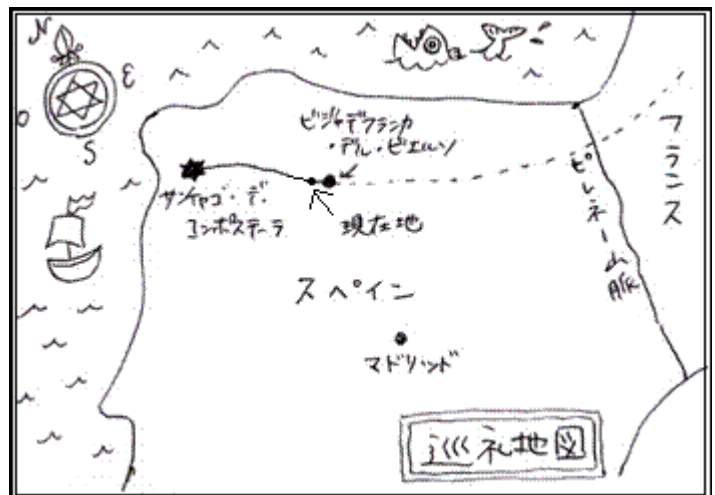


この日泊まった宿はすてきな所で、宿の入り口には、つるばらが満開に咲き、目の前には放牧場が広がっていて、牛がのんびり草をはんでいます。その向こう側には白樺の林沿いに小川がゆるやかに流れています。夕食もとっても豪華。カルド・ガジェゴ(ガリシア風野菜スープ)に続いて、赤ワインを飲みながら、子羊のステーキをゆっくり食べ、最後はアロス・コン・レーチェというお米とミルクの冷たいデザートで締め。景色の良い半テラス席で、窓の向こうには牧草地が見渡せ、贅沢なひとときでした。



さあ、今日は高低差もそれほどなく、半分ほどはアスファルトで舗装されていましたが、明日からは森の中を標高 1300 メートルまで歩きます。日記を書いて、その日は早めにベッドに入りました。

第3回へつづく



### サンチャゴ巡礼日記3

2009年6月15日、日本を出発して5日目、巡礼開始3日目。この日は今回の巡礼で最も険しい山道を歩きます。そのためガイドの佐々木さんが、私たちツアー客の体力を考えて8.5キロと、歩行距離を短めに設定してくれました。8時半にホテルで朝食。この日にはコーヒーだけは自分で頼めるようになっていました。「カフェ・コン・レーチェ」と言って頼みます。スペインのコーヒーは濃いので私は必ずミルク入りを頼んでいました。「カフェ」がコーヒーのこと。「コン・レーチェ」がミルク入りの意味で、この単語はいろいろと応用が利いて、「アグア・コン・ガス」と言えば炭酸ガス入りの水が、「アグア・シン・ガス」と言えば、ガス抜きの水が出てきます。

9時にホテルを出発。途中の村でアジの缶詰、トマト、パン、水を購入。山の上で食べるお弁当にしました。巡礼路は山道に入り、鬱蒼とした森の中を歩くようになりました。すると、どこからか、カランコロンと鈴の鳴る音が…。なんと深い森の曲がり角のむこうから大きな牛が姿を現したではありませんか！しかも何頭も何頭も…。牛って、山を登り下りするんですね～。びっくりです。群れの先頭に牧童さんが、しんがりに大きな犬が、牛の誘導役についています。もちろんこんな時、道を譲るのは巡礼者の方です。あまり広くない道の端ぎりぎりに寄って、牛がすべて通り過ぎるのをじっと待ちます。あんなに牛を間近で見たのは初めてでした。



私より身長の大らかなクリーム色や茶色の牛たちの、長い長いまつげまでしっかりと見ることができました。そして、巡礼路でもうひとつびっくりしたのが、この国のなめくじ！なめくじといってもこの国の彼らは、日本のもののように肌色と茶色のしましまとか、大きくてもせいぜい小指くらいとか、そんな生易しいものではありません。この世の終わりのように真っ黒なのです。そしてデカイ！犬の落とし物と間違えるくらい大きいのです。人間を食べそう…。怖すぎます。



さてさて、そんな山道をひたすら登っていくとだんだんと生えている植物の種類が変わってきます。標高が高くなり、背の低い植物が増えて、見晴らしがよくなってくるのです。見渡す限りのなだらかな山、また山。地平線は青くけむっています。レオナルド・ダヴィンチのモナリザの背景に描かれているような景色がそこにはありました。そんな素晴らしい景色を眺めながら、草の上に座って、田舎パンにアジの缶詰のサンドイッチを食べ、生のトマトをかじりました。この旅で一番おいしい食事でした。



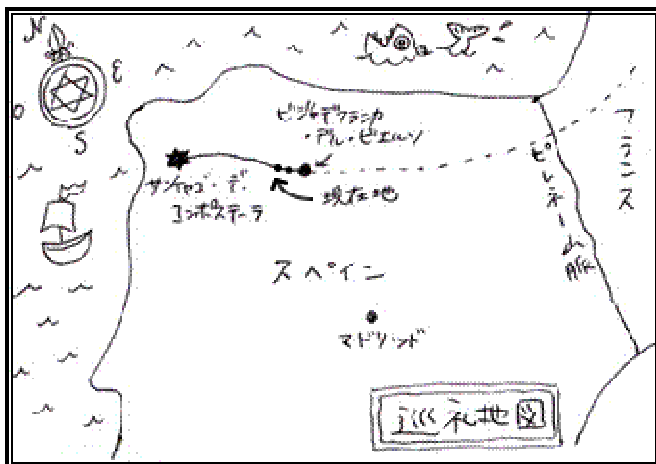
出発してから4回ほど休憩を入れて、14時半ごろ本日の宿泊地セブレイロ村に到着。この日、セブレイロは村全体が雲の中に入っていました。村の外は快晴

なのですが、標高が 1300 メートルと高いため、雲が村にひっかかっているようです。村を囲む石垣の上に人が立つと、向こう側が雲で何も見えず、少し怖くなる情景でした。村に入ると、行きに会った巡礼者のフランス人の紳士に再会。気のいい人で、再会を喜んで頬にキスしてくれました。50 代くらいに見えましたが、なんと、78 歳でした。セブレイロにはお土産物が充実しています。私もハガキを 5 枚買って、家族や友人に手紙を書きました。ハガキと切手を買った店のお姉さんが水を出してくれて、一緒に切手を貼ってくれました。



20 時～村の夕べのミサに参加。手の柔らかかそうな  
柔和な神父様が、私たち巡礼者を前に呼んで、特別  
に旅の無事をお祈りしてくださいました。この日の  
夕食は温かい野菜のスーに、肉のソースを絡めたマ  
カロニ、デザートはフレッシュチーズの蜂蜜がけで  
した。

夕食を食べ終わった 22 時、ようやくセブレイロ  
の日が暮れ、村はほの暗く、霧の中に沈み始めてい  
ました。



第 4 回へつづく

## サンチャゴ巡礼日記4

2009年6月16日、日本を出発して6日目、巡礼開始4日目。今日の20.6キロの道のりは、下って登って下ってと高低差が激しく、初めてとても疲れしました。セブレイロの朝はかなりの冷え込みで、下調べのとき、巡礼経験者が上着は必要と言っていた意味を痛感。私は薄手のカーディガンしか持っていなかったの、ちょっと寒かったです。しかし、日が昇ってくると気温はぐんぐん上がり空気は乾燥して、牛の糞やほこりにまみれて歩く一日でした。昔の旅というものは、車も整備された道路ありませんから、きっとこのような旅だったのでしょ。

普段、サンチャゴ巡礼では、現地のサンチャゴ巡礼協会が用意してくれている黄色い矢印を道しるべに旅をします。その矢印は普通、都会では看板やタイルになっていますし、舗装された道路があれば、そこに直接ペンキやカラースプレーで書かれています。それらのない田舎では、建物や石垣、ときには道端の石に書かれています。この日は書かれていない場所に出くわし、巡礼仲間たちとあっちへうろうろこっちへうろうろと、少し道に迷ってしまいました。



こんなとき、サンチャゴ巡礼では、太陽を道しるべにすることができると、ものの本には書かれています。これは、聖地サンチャゴがスペインの西の端にあり、カミーノ・デ・フランセスといわれる私たちが通った道が、フランスからスペインまでほぼ真西へ向かう道だからです。そこで、午前中は自分の影を追いかけ、午後には自分の影を背にして歩けばいいというわけです。同じ理由から夜は天の川を辿

っていくこともできます。旅のロマンですね。

しかし、実際に旅をしてみるとこれがなかなか難しい…。鬱蒼とした森の中や曇りの日には太陽の位置はわかりにくいですし、道はくねくねといろいろな方向に曲がっているからです。それで幾人もの旅人たちがこの道で命を落としてきたのです。幸い、私たちは、しばらく右往左往した末に黄色の矢印を見つけ、すぐに旅を続けることができました。この辺りに来ると、山の斜面に牧草地が広がり、とてもものどかな風景です。野原一面にひなぎくの花が咲き、道端のそこそこには忘れな草が顔をのぞかせて、それはそれは、可愛らしいのです。忘れな草には、瑠璃色から空色までさまざまな色味があって、じんと心に響きます。どうして神様はこんなに美しいものをこの世





にお創りになったのだろうと、思わずにはられません。この日は、険しい山道を登りきった所で、朝出会ったオーストリアの団体さんと再会。お土産に千代紙をあげると、とても喜んでくれました。サンチャゴ巡礼では驚くほど中高年の紳士やご婦人に出会います。日本でいえば、団塊の世代かそれ以上にあたる人達です。仕事を定年退職し、子育ても終わって、余裕のあるお金と時間を使ってトレッキングを楽しみつつ、巡礼をしているようです。バスに乗ったり、降りて景色の良い所を歩いたりを繰り返しながら進んでいるようで、そこは体力のことをツアー会社側が配慮してのことなのでしょう。

さらに進むと、人通りの少ない田舎道に出ました。小さな家の軒先に白いテーブルが置いてあって、その上に木いちごが並べられていました。どうやら、隣の空き缶にお金を入れれば自由に持っていってもいいようです。私たちも1ユーロずつ入れて1パック買い、歩きながら食べました。

だいぶくたびれたところで、ようやく本日の目的地トリア・カステージャに到着。この日の宿は、その名も「DAVID」！（スペイン語でダビデの意）ここの大家さんの名前だそうで、よく太った剛毅そうな人でした。さて、この日の夕飯は、ついにスペインの代表料理パエリアを食べることに！

ところが、そんな日に限って、私は大失敗をやらしました…。私は実は全くお酒が飲めません。それまでは、十分自分でも気をつけていたのですが、この日はワインをソーダで割る特別な飲み方をされていて、いつもより飲みやすかったのがいけなかった！ついつい油断して何度もグラスに口を付けていたところ、急に耳に綿がつまったように、聞こえなくなってきました。今までの経験からこの後、もっと具合が悪くなることが予想できたので、すぐに巡礼仲間に断り、くらくらしながら宿に戻りました。すると、巡礼仲間がパエリアを部屋に運んでくれ、私の分の洗濯物を代わりに取り込んでくれました。周りの方の親切に助けられた一日でした。

第5回へつづく



## サンチャゴ巡礼日記 5

2009年6月17日、日本を出発して7日目、巡礼開始5日目。8時起床。8時半朝食。9時半出発。この日はスペインのキリスト教に触れる一日でした。朝一番にトリア・カステーリャの教会を見学。ロマネスク建築の古い教会です。ロマネスク建築が始まった11世紀、それは同時にサンチャゴ巡礼が盛んになり始めた頃でもあります。西側に立つ高い塔は長い年月の風雨に耐え、灰色にくすんでいます。薄暗い教会堂の中には、祭壇の向って左にイエス・キリスト、右にはスペイン人が愛してやまない聖母マリア、そして中央に長い杖を手にして巡礼者に祝福を送るサンチャゴこと、聖ヤコブ像が安置されていました。



教会堂に別れを告げ、この日はさらに山あいの修道院を訪れるため、少し寄り道をしてサモスという町を目指しました。美しい山道と小川の流れる村を過ぎて、サモスに到着したのは午後2時頃。10キロ弱の行程でした。

段々日課になってきたシャワー、洗濯を終えると、パン屋さんでビスコッティ(スペイン・カステラ)を買い、修道院が開くのを待ちました。スペインのカステラは日本のカステラと違って、直径50センチくらいの巨大な円形に焼かれていて、味はパウンドケーキに似ています。巡礼中、何度も食べましたが、どの村で食べても大抵とても美味しいものでした。

サモスの修道院は黒い僧服のベネディクト派の修道院です。のどかなスペインの午後、明るい日差しの中、バル(喫茶店)の店先で黒い詰襟に身を包んだブラザーたちが、足を組んでテラス席に腰かけ話し合う軽快な姿は、日本ではあまり見ないものでした。(ちなみに、ブラザーたちが飲んでいるのはアルコールではなく瓶のコーラでした(笑))



さて、16時半になってようやく修道院が

開場。美人の院内ガイドさんに付いて、中を見て回りました。

昼間道で出会ったスペイン人のおばちゃんもそこに来ていたのですが、日焼けがとても痛そうでした。「痛そうね」と、心配顔で日本語で話しかけたら、「そうなのよ」とスペイン語で返ってきました。スペインを旅して思ったのですが、どこか痛いとか、お腹が減ったとか美味しいとか、何かが美しいとかうれしいとか、人間の根源的な事柄は言葉が違って

も結構通じるものです。たぶん、表情や声の抑揚などの雰囲気を通じるのでしょうか。

この修道院には中庭を囲んで、美しい回廊が巡っています。柱の壮麗な彫刻には所々に可愛らしいトカゲが隠れています。床にはタイルによるシンメトリーのバラやヒナギクの花が踊り、見ていると心が整えられていくような気がします。ここで暮らすブラザーたちも日々この回廊を歩き、もの思いに耽るのでしょう。

回廊の次は骨の聖遺物のある広間を歩いて聖堂へ。すごい形相で回教徒の首を踏む王様の像や、クリクリお目めの聖ヤコブ像など、様々な像が安置され、いくつもの祭壇が華麗に装飾されています。聖母マリアを祀った祭壇が隅の方にあるのですが、この一角がまた可愛らしい。柱にはつるばらが巻きつき、小首をかしげた乙女マリアはお付きの天使や聖女、シスターたちに囲まれ、心穏やかにこちらを見つめています。頭上には花が散りばめられ、全体が他の祭壇にはないような繊細さでカラフルに彩色されています。何よりその大きさが控えめで可愛らしいのです。乙女マリアの頭は子どもの握りこぶしくらいでしょうか。なんとも少女趣味な祭壇で一見の価値ありです。



修道院見学の後は、ホテルの部屋で休憩。デジカメの友人の写真を見てなごみました。19時半からミサに参加。20時半に地元のステーキハウスで夕食。今夜は薪焼きの子羊のステーキです。大きな木の皿にこれでもか！という大きなお肉が乗ってきます。皿には隅に小さなへこみがあって、そこにソースを入れて、肉をつけて食べます。文句なく、美味しい！



さて次回は、パン屋さんの絶品チョリソサンドとツナパイが登場して、ますます元気に旅は続きます。お楽しみに！

## サンチャゴ巡礼日記6

2009年6月18日、日本を出発して8日目、巡礼6日目。昨日、カステラを購入したパン屋さんでパンを買うと、パン屋さんが好意でスパイスたっぷりの自家製チョリソ(ソーセージ)をはさんでサンドイッチにしてくれました。それを川岸の石垣に腰掛けてみんなでもぐもぐ。食べ終わると、もう一度パン屋さんに行き、今度はお弁当用に大きなツナパイを購入しました。しかし、そこはスペインですから、このツナパイはもちろん?...そうです、とっても大きかったんです。日本のピザのレギュラーサイズより大きく、とても片手では持てません。かと言って、両手で持つと上手く歩けません。すると、パン屋のおかみさんが私たちが困っているのを察して、持ちやすいようにとビニール袋を裂いて、持ち手を作ってくれました。田舎のお母さんのたくましい優しさに触れた瞬間でした。



テレ・バンコ(ATM)で所持金を補充してサモスを出発。ツナパイはみんなですわりの代わりばし。歩き始めてすぐ、日本人巡礼者に会いました。私たち以外の日本人巡礼者を見たのは、この旅で初めてのこと。その日本人男性は、上下白のさっぱりした服装に麦わら帽子という出で立ちでした。仕事を定年退職されてから、四国お遍路の挑戦をへて、サンチャゴ巡礼に来られたのだとか。この巡礼ですでに日本人に何人か出会い、外国人とも親しくなってメールアドレスを交換したと話してくれました。楽しくおしゃべりをしたのですが、そこは自分のペースで歩むのが大切なサンチャゴ巡礼のこと、しばらく一緒に歩いてから「ブエン・カミーノ(良い旅を)」と声を掛け合い、お別れしました。



森の石垣に腰掛けて朝購入したツナパイで昼食。しかし、4人で食べても食べきれず、夕食もツナパイを食べることになりました。スペイン料理おそろべし...。この日の行程は8キロ程度でしたが、出発が10時と遅く、宿泊地サリア到着が16時と遅れたため、気温が高い時間に陰のないところを歩いて体力を消耗してしまいました。

サリアに到着してからが一番疲れしました。サリアは開発が進んでいる最中なのか、新しく高い建物が多く、あちらこちらで工事が行われていました。街に入ってもなかなか陰がなく、街全体がほこりっぽい。街中では、道であった白服のおじさんに再会し、おじさんの話していた日本人巡礼者の青年にも初めて会ったのですが、それらの出会いを十分喜ぶ余裕もなく、ホテルにたどり着いたときにはぐったりして、体を引きずるようにしてシャワーを浴びました。



少し仮眠を取った後、19時半からミサに参加。教会の世話係りの方が、メガネをかけた

スキンヘッドの紳士で、歩き方が流れるようにきびきびとしていて印象的でした。また、地元の信徒の方が声を合わせて歌う賛美歌も美しく、聖堂の高い天井へと響いていました。スタンドグラスは御聖体やブドウの房を意匠化したシンプルなもの、イタリアより色がすっきりとして鮮やかな印象でした。聖堂に入りミサに参加すると、気分が変わって救われる思いがしました。その日は、特別な礼拝の日だったようで、聖体拝領の後祈りと賛美歌が何度も繰り返され、皆で信仰を新たにしている

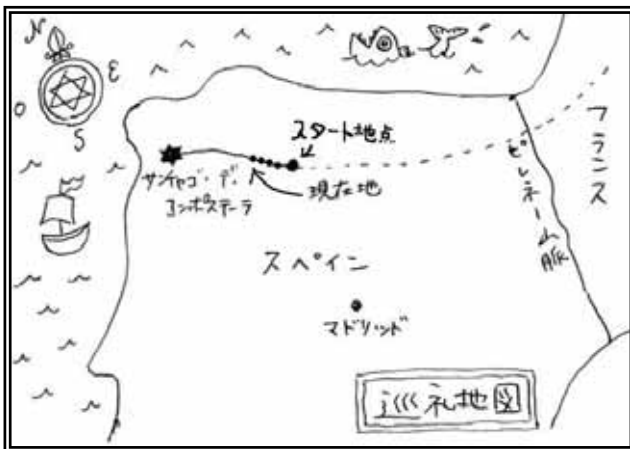


ようでしたが、明日のこともあるので、私たちはミサを中座して夕食を食べに行き、ホテルに戻りました。

食後、日本の家族に国際電話を試みましたが、接続が悪いのか、回線が込み合っているのか、どうしても繋がりませんでした。毎日、スペイン北部の電話事情の悪さと戦う私なのでした。



第7回へつづく



## サンチャゴ巡礼日記7

2009年6月19日、日本を出発して9日目、巡礼7日目。この日、巡礼仲間の女性がフラメンコの学校が始まるため、巡礼から抜けることに。朝、女性と別れを告げると、私たち三人は、開発の街サリアを出て、人工湖の街ポルトマリンへ向かいました。

距離にして22.4キロ。ポルトマリンの手前では長く下り坂が続きます。上り坂も大変ですが、下り坂も体にこたえます。足にくるのです。ふくらはぎの筋肉が魅力的な、スペイン人のカルロスさんは、髪を短く刈り込んだイケメン登山家で、とても人懐っこい笑顔で私たちに話しかけ、道をきいてきた人です。しかし、山道には慣れているはずの彼も、この日は足を引きずっていました。道端の石ころをまともに踏んでしまい、膝を痛めたようです。

巡礼路には、様々な方法で巡礼をしている人たちがいます。マウンテンバイクで登る人もありますし、同じ自転車でも高速道路を駆け抜ける人もいます。珍しいところでは、今はやりの

トレイルランニングとやらで、山道を走って登ると根性の人...。地道に自分の足でゆっくり進む私たちはこの日一日、足元に気をつけながらの道行きでした。

ところで、この日の前半というのは、私にとってはひどい一日でした。まず、朝、巡礼仲間のおじ様たちが些細なことと言い合いになりました。間に入って少々気疲れし、この山道による体力的な疲れ。さらに、ポルトマリンのホテルに着いてみると、部屋のベランダに続くガラス扉が壊れていて、洗濯物が乾かせませんでした。荷物を少なくするために着替えは一对しかありませんから、洗濯物が乾かないのは本当に困るのです。その上、日本の家族や友人に全く連絡がつかない！ホテルの外にまで公衆電話を探しに行き、繋がって友人の声が聞こえた瞬間に電話が切れたときには、私はすっかりしょんぼりしてしまっていました。

心細い思いで、とぼとぼとホテルへ向かう坂道を下っていると、向こうから見知った顔の人が...。それは、昨日サリアで見かけた日本人青年でした。さっそく声をかけ、友達になりました。

彼は3ユーロほどで泊まれるアルベルゲ(巡礼宿)に泊まっていたのですが、虫に刺されて足が腫れてしまい、薬をスーパーに買いに行った帰りだったようです。この青年、ぶちさんは、フランスから巡礼をスタートして、すでに1ヶ月以上旅を続けているとのこと。しかし、とてもそんな風には見えません。日にはよく焼けていますが、私より華奢な体格の人で、巡礼が始まってから10回以上女性に間違われたと笑っていました。

立ち話もなんなので、近くの喫茶店でファンタレモンを注文。二人ともスペイン語がよ



くわからない中、がんばって注文すると、スペイン人の店員さんが、「ちめたい(冷たい)?」と日本語を覚えてくれ、なごませてくれました。その店員さんはこの日本語が気に入ったようで何度も「ちめたい!」と、私たちに話しかけては喜んでいました。でも、最後まで間違えていました(笑)。ぶちさんは、私と同じくらいスペイン語がわからないにも関わらず、とてもものんびりとしていました。「『ぶえん』という言葉は覚えたよ」と言い、相手の様子でなんとなく内容を察しては、とりあえず、「ぶえん、ぶえん(良いよ良いよ)」と声をかける姿に、肩の力が抜け、とてもほっとしました。



ぶちさんとひとしきり話してうちとけたところで、そろそろ日課の夕方のミサの時間がやってきたので、お礼を言って別れました。20時から地元のミサに参加。なんとここでも日本人に会うことができました。巡礼の長旅で顔はすっかりごま塩色のひげに覆われていましたが、教養のある方だと思わせる落ち着いた物腰と静かな話しぶりの初老の紳士でした。

紳士は、私が自分の娘に似ていると言いました。そう言われたときは一瞬新手のナンパかと思

い、警戒したのですが、紳士は本当に似ていると思ったらしく、娘さんの写真を見せてくれました。なるほど、黒髪を後ろでまとめている様子や、化粧の雰囲気など似ていなくもありません。しかし、娘さんの方がずっとずっと美しい方で、白いウェディングドレスを着て、写真の中で微笑んでいるのでした。

その後紳士は、自分が病院のスペイン語通訳として働いてきたこと、定年後はサンチャゴ巡礼に何度も行き、自分の語学力を生かして、アルベルゲでボランティアをしながら進んでいること、日本の教会にもサンチャゴ巡礼協会ができたので、日本発行の巡礼手帳第一号をサンチャゴの司教様に手渡しに来たことなどをすっかり話してくれました。

紳士と並んでミサにあずかり、私は祈りました。今日一日自分が悩んだことを思い起こし、イエス様ならどうなさるか考えました。そして、人が自分のしてほしいようにならないからといって、気に病んだり腹を立てたりする自分の愚かさに思いいたり、神に許しを請い、巡礼仲間のために祈りました。

このとき初めて、ミサとは一日の節目節目に、仕事や人間関係という日常を離れ、イエス・キリストと神様に心を寄せ、自分の感情を整理する時間なのだ気づきました。

ミサが終わり、紳士と、また会いましょうと言い合って別れました。こうして、すっかり気分転換した私は、その日の夕刻には、湖に面したそれは美しい眺めのレストランで、夕焼けで桃色に染まる湖と美味しい食事を笑顔で楽しむことができたのでした。

夕食後のホテルへの帰り道では、昼間道で出会ったおじいさんと再会しました。ドイツのシュトルツガルトから自転車で2500キロ飛ばしてきたそうです。明



るくてガッツのあるおじいさんでした。ホテルに戻り、日記を書いて、ベッドに入りました。

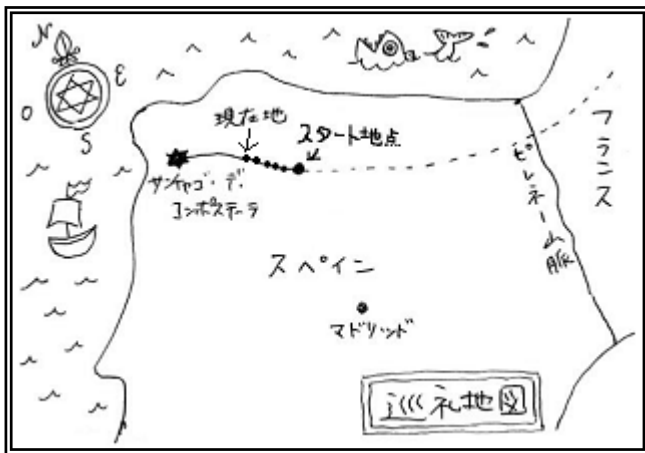
朝 4:20、ふと目が覚めたので、窓ごしに外に目をやりました。星が出ています！サンチャゴの道は星野の道といわれるほど、サンチャゴ巡礼の星空は美しくて有名です。私はずっとずっと見たかったのです。けれども、星が出ているような時間になかなか起きられず、さりとて睡眠時間を削って星が出るのを待つ勇気もなく、この日までまだ一度も星を見ていませんでした。

大喜びした私ですが、そこで、部屋のガラス扉が壊れていることを思い出しました。扉が閉まったままだと、星は、部屋の向かいにある林に遮られてほんの少ししか見えませんでした。ああ、もっと見たい！しかし、朝4時といえば、スペインでは真夜中です。外国人女性が真夜中に一人出歩いたりしたら危なくないでしょうか？ああ、でも見たい…。悩んだ末、恐る恐る、部屋のドアを開け、外に出ました。誰かが目を覚まさないように、そっとそっとドアを閉め、そっとそっと鍵をかけました。静かに廊下を進んでいくとサロンに出ました。そこには部屋と同じ作りのガラス扉がありました。ここがもし開かなかつたら、もっと怖い思いをしてホテルの外まで出なくてはなりません。ドキドキしながらドアノブを回し、扉を押すと…開きました！

冷たい外気に触れてベランダに出ると、満点の星空が待っていました。私は池田で育ちましたからこんなにすごい星空は見たことがありません。星が多すぎて、そのことが不思議すぎて、ちょっと怖くなるほどでした。こうして一日が終わってみると、なんと出会いの多く、実りの多い一日だったことでしょう。

私は、静かに部屋に戻ると、満足した気持ちで眠りに落ちました。

第8回へつづく





## サンチャゴ巡礼日記 8

2009年6月20日、日本を出発して10日目、巡礼8日目。今日は25キロと、長距離を歩きました。巡礼路では様々な動物に出会います。目の色の薄い外国人顔した犬や牛には毎日会いますし、馬が柵越しに顔を出していることもあります。この日、新しく出会ったのは子羊でした。

子羊は群れからはぐれて一匹でとぼとぼと歩いていました。本物の迷える子羊です(笑)。子羊は、農家の庭先から塀をぐるっと回って外に出てきて、帰り方を忘れてしまい、困って鳴いているのでした。低い石塀の向こうには仲間たちが見えるのに、なぜか自分はそちら側へ行けない。焦って余計にわけがわからなくなり、か細い声で、めえーめえーと鳴く姿は、なんとも切ないものでした。しばらくはらはらしながら見守っていると、子羊は、塀の向こうから聞こえる仲間の声に勇気づけられて、生け垣の隙間を見つけて庭に帰って行きました。求めよ、さらば与えられん。ですね。



巡礼路で、昨日出会ったイケメン登山家カルロスさんに再会しました。彼はアルベルゲに泊まっているのに、驚くほど小さな赤いバックパック1つしか背負っていません。アルベルゲには簡素な寝台しか置いていないのに、寝袋は一体どこに入っているのでしょうか？ 足は良くなったらしく、軽快に歩いていきます。知らない人にどんどん話しかけ、あっという間に仲良くなる不思議なイケメンでした。

カルロスさんとも別れ、見晴らしのいい山道の広いところに来たとき、空をふと見上げると、飛行機雲が見えました。隣に行き会ったドイツ人のご婦人に「飛行機雲！」と、日本語で話しかけると、「オウ！」と喜んでくれて、「フルーク、ツァイン！」と、飛行機雲のドイツ語名を教えてくださいました。私はこのドイツ語を巡礼が終わっても覚えていましたし、あのときのご婦人の明るい笑顔と優しい声を含めて、きっと一生忘れないでしょう。

さて、そのご婦人の次には、イタリア人のフランチェスコさんと知り合いました。大卒で、顔はなかなかハンサムな24歳。なのに、頭はハゲ気味。一見しても悩みの多そうな人で、ラテンの陽気さというのは、彼の表情の中にひとかけらもなく、歌とパスタの国の人とは思えないくらい真面目で実直な受け答えをする人でした。しかし、カタコトの英語で話しかけたり千代紙を渡してきたりする、この不細工な日本人娘を煙たがる様子もなく、しばらく静かに並んで歩いてくれ、道でクワガタを見つけると、イタリア語でクワガタは

スカラベ、暑いのはカルゴ、寒いのはフルゴというのを教えてくださいました。一度も笑顔は見せないけれど、優しい人でした。

ホテルに宿を取っている私たちはいいのですが、アルベルゲに宿泊しながら旅を続けている人は、一日の巡礼を終えようというときが一番大変です。どんなに歩き疲れていても、そのアルベルゲのベッドに空きがなければ次のアルベルゲまで歩かなくてはならないからです。途中で分かれたフランチェスコさんも、道の向こうから引き返ってきて、ひとつ前の村までアルベルゲを探しに行くと言ってすれ違っていきました。見つけても、そのアルベルゲだって環境がいいとはかぎりません。多くのアルベルゲでは、シャワーは水しか出ず、ベッドにはダニが出ることもあります。けれども、賃金の安さと集団素泊まりならではの人の出会いに惹かれて、巡礼の盛んな春～初夏、秋の初めのアルベルゲはいつもいっぱいなのです。



さて、このころ私は、化粧をしないことは精神の修行になると感じ始めていました。私ときたら、服代を極力切り詰めたので貧乏臭く、昼間は汗で化粧が落ちるのでもちろんノーメイク。しかし、巡礼を進め、このあたりに入って人が増えてくると、フルメイクにきらきらピアスの美女や、かっこいい彼氏と並んで颯爽と歩くおしゃれタンクトップの女子大生が目につくようになり、私も見栄が張りたくなくなってしまいました。今回、私はここへおしゃれやら恋やら、しに来たわけではないのですが…。一応、乙女としては悩むところです(笑)。煩惱と戦いながら、私はひたすら歩き続けました。日本では、自分を着飾るような贅沢が容易にできてしまいますし、TPOによっては着飾ることが求められる場合もあります。巡礼は、荷物、安全、健康などの点から思うようにおしゃれはできないので、良い人生経験になりました。



この日の宿は、パラス・デ・レイという田舎町のホテル。シャワー、洗濯を済ませると、散歩に出て、バルでガイドさんにレモネードをご馳走になりました。その帰り道、フランチェスコさんに遭遇。どうやらこの町のアルベルゲは空いていたようです。良かった良かった。でもやっぱり笑顔は見せないフランチェスコさんなのでした。

夕食には、外のレストランでタコをいただきました。海が近くなってきたのです。レストランでは、隣の席のドイツ人がイタリア人ばりに大はしゃぎしていて、パラス・デ・レイの日は暮れていきました。

第9回へつづく

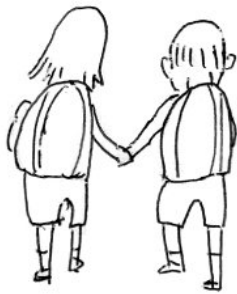


## サンチャゴ巡礼日記 9

2009年6月21日、日本を出発して11日目、巡礼9日目。バックパック(リュックのこと)が小さ過ぎて、大きな1リットルペットボトルの水が入らず困りました。この日からは大きいペットボトルの水を小さいペットボトル2本に分けて、それをバックパックの左右のポケットにむりやり突っ込んで歩いていました。20リットルのバックパックでは容量が少なすぎたようです。9:00にパラス・デ・レイを出て、15キロ歩きました。今日は少なめの距離です。ひげもじゃのおじいさんがやっているバルで休憩していると、かわいい茶色の子犬が足元をうろうろして、ニオイをかいでくれました。



でこぼこ道の森林や、ほこりっぽい国道に沿って進んでいくと、今日もたくさんのお会いがありました。まず、旅の初めに会ったひげのりっぱな老紳士とその夫人に再会しました。まったくこのひげの紳士ときたら、見るからに知的でお茶目な雰囲気の人で、目を引かずにいられません。



昨日のミサからは、仲の良い男女の二人連れを見かけるようになりました。女性は40代くらい。男性は70代に見えますが、どこか身体の具合が悪くて老けて見えるだけなのかもしれません。父と娘のようにも見えますが、道では手を繋いで歩み、ミサではぴったりと寄り添い、男性の方も女性の方もお互いを思いやる様子は、本当に仲むつまじく、夫婦か恋人同士のように思えました。日本ではお互いを心から思いやっても、このように寄り添って、その気持ちを表現

することはあまりありません。西洋の国、また巡礼路ならではの光景でした。

そういえば、韓国人の女の子二人連れとも今日再会しました。日本で別れの間際に友人にもらった飴玉をあげると、女の子たちは「ありがとうございます」、「おいしい」と、日本語でお礼を言ってくれました。

その先を歩いていた金髪の美女二人はパック入りのチェリーを手に持って歩いていました。私が「わぁ！」と声をあげて、そのチェリーを見つめたら、どうぞと、おすそ分けしてくれ、お返しに千代紙をあげたら、きれいだと、喜んでくれました。



13:50、この日の宿泊地メリデ到着。さて、ここのホテルがツッコミどころ満載でした。

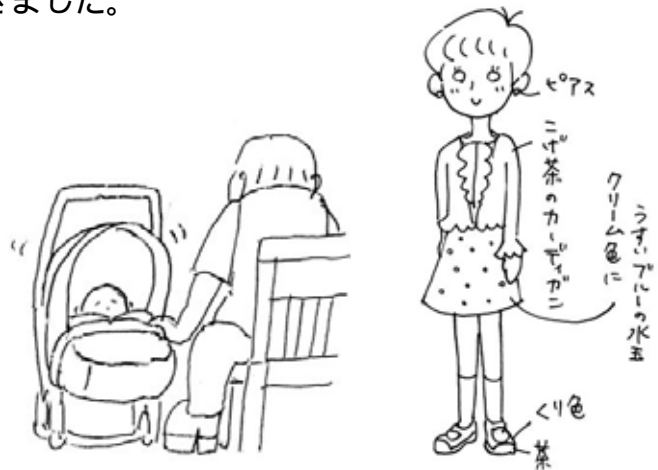
まず、なぜか内側から鍵がかかりませんでした。そんなに治安がいいんでしょうか？それから、浴室のバスマットが犬用！？と思うほど汚かった...上に、その柄がまたすごくて、なぜ宿主はこのチョイスにしたのか...。子どもの落書きの様な、棒人間ならぬ棒ライオンが描かれていてシュールでした。テレビのリモコンはフタをつけてもつけてもすぐ取れる。

と、いうよりも初め、部屋に入って一番に目に入ったのはベッドの上に丁寧に並べられたリモコンとそのフタだったのですが...

一番傑作だったのは、置いてあるシャンプーが、リンスインシャンプーではなく、シャンプーであり、バスジェルだったこと。超斬新！頭洗った勢いで、体も洗えちゃうよってか？と、独り

でツッコミを入れながらシャワーを浴びました。そのシャンプーで髪の毛を洗ったら、髪がゴワゴワになって、日本では出たことのないボリュームが髪に出ました。

お昼寝をして、夕方からミサに参加。この教会のミサにはたくさんの方が来ていました。日曜日なので、子どももちらほら。この辺の小学校一年生くらいの女の子の服装が古風で、色合いといい、形といいかわいらしかったです。おじいさんが首も据わらないような赤ちゃんをベビーカーに乗せて連れてきていました。耳にピアスがしてありますから、赤ちゃんはきっと女の子でしょう。おじいさんは片方だけヒールの高い不思議な靴を履いていました。生まれつき片方の足が短く生まれついた人なのかもしれません。帰り際、おじいさんに声をかけて、赤ちゃんの手を握ってきました。



ミサの後、この教会のセージョ(巡礼の証明スタンプ)を押しに行きました。いくつか部屋があり、中にはマリア様やイエス・キリストのリアルな人形が安置してあって怖かったです。小さな教会事務所で神父様自らセージョを押してくださいました。

その後、夕食を食べに外へ。この日の夕食はタコ専門店の居酒屋さんで、定食と、ゆでダコをいただきました。その居酒屋ではワインは茶碗型の器に入れて飲みました。そういう地方のようです。タコはたっぷりの塩で茹でて、オリーブオイルと粉末パプリカがかけただけのシンプルなものですが、これがなかなかおいしい。私も日本に帰っ



てからやってみましたが、案外簡単に味が再現できます。是非、一度ご家庭で作ってみ

てください。居酒屋さんにはその従業員の子どもも来ていました。こちらの子どもは大きくて、9ヶ月でも1歳くらいに見えますし、大きさだけなら3歳くらいにだって見えます。

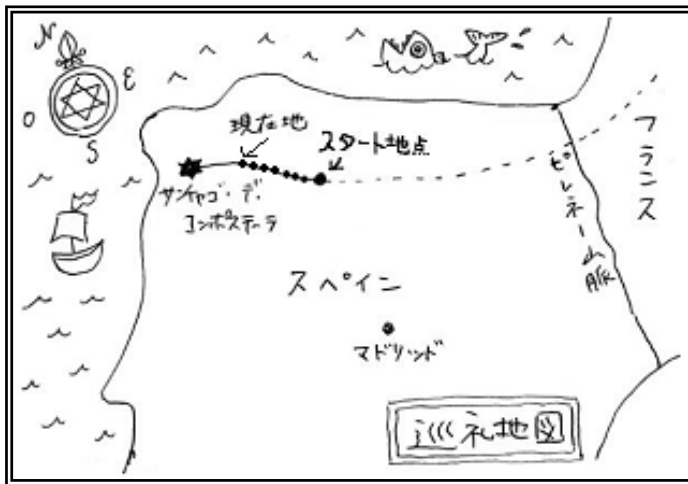


タコを十分に楽しんでから、ホテルに戻ってベッドに入りました。昨日は寒くて風も強く、風邪をひきそうだったのに、今日は暑くて寝られませんでした。そして、腰の調子がどうも妙な感じになってきていました。痛みはないのですが、浮いたような不快感があるのです。あと、2,3日だけもってくれと祈りました。

眠れない中、さまざまなことを考えました。サンチャゴでは、いろいろなことを考えさせられます。まず、言葉が通じなくても気持ちが通じたり、言葉が通じなくてストレスを感じたり、言葉が通じて心も通じ合わなくて辛かったりということが起こります。それから、サンチャゴでは、あまり農薬を使いませんから、安心して野菜が食べられます。空気がきれいで、景色が美しい。けれど、道には牛のフンが落ちていて、ほこりっぽくて、シャワーは湯加減が難しいし、日本人には必須の湯船がありません。スペインは光が明るくて、店にはお昼休みがあって、ビールをお店に卸しにきた兄ちゃんは、その店で一杯やってから帰っていき、夜は10時を回ってから日が沈みます。ここには、日本にないすべての余裕が感じられます。それでも、私はやっぱり日本が恋しい…。そんなことを考えながら、窓辺から下を見下ろしてみれば、夜のメリデはいまだにマフィアがいそうな町に見えました。

空には今日も幾千万の星。星空を見上げながら一睡もできないまま、いたずらに時間だけが過ぎていきました。

第10回へつづく



## サンチャゴ巡礼日記 10

2009年6月22日、日本を出発して12日目、巡礼10日目。体力的な疲れからくる緊張と、精神的なストレスから、前日ほとんど眠れず、2時間寝れたか寝れない状態で、13キロ歩くことに。いつもより短い距離だったのですが、次の町にたどり着いたときには、全身が激しくほてり、気力だけで歩いている状態になっていました。



ホテルの部屋に入ると、その足で洗面所に向かい、顔を洗い、足に水をかけ続けました。首に冷たいタオルをかけたところで、やっと体が落ち着いて楽に。どうも熱中症になりかけていたようです。しかし、ホテル到着15分後には、再び下に入り、ホテルのレストランで仲間と昼食を食べました。巡礼仲間に心配はかけられないし、ここで食べなかったら体のリズムが崩れるからです。

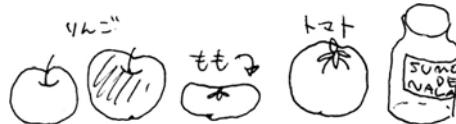


温野菜と銀ダラを食べました。パンとアイスクリームと飲み物がついて10ユーロ。日本のランチとあまり変わらない値段ですが、ボリュームはたっぷりでした。このレストランの目のぱっちりしたコックさんは、コックであり、ウェイターであり、フロント係りであり、ホテルオーナーの息子さんでした。日本ではあまり見かけないことですよね。スペイン人の働き方、生き方って面白いものです。

部屋に戻って19時まで過ごし、昼寝や洗濯をすませ、久しぶりに湯船に浸かって旅の疲れを取りました。少し元気になって、明日の朝食を買いに出かけました。

赤と黄色のリンゴをひとつずつ、トマトをひとつと、オレンジジュースを一本買いました。スペインでは、日本と同じような丸いモモも売っていますが、ざぶとんのような平べったいモモも売っています。

どんな味が食べてみたくて、これもひとつ買いました。





この日も地元のミサに参加しました。ミサの最後に神父様が巡礼者のために祈ってくれ、泣きそうになりました。今日、少し楽になれたのは、この神父様と、道で出会ったイギリス人の男性のおかげかもしれません。そのイギリス人は恰幅がよく、目と眉毛に明るい雰囲気漂う 39 歳で、8 ヶ月になる女の子のパパだと言っていました。会社の新しいツアー計画の下調べのためにサンチャゴを歩いていたようで、熱心にメモを取り、デジカメで写真を撮っ

ていました。彼は、僕はあと3日で帰れるんだ、今、子どもが本当に可愛くて、早く会いたいんだと言っていました。この人に、昨日眠れなかったことや、ストレスのこと、言葉のことを英語で話せたのが救いでした。いい人はみんな結婚しているんだよなぁと思いつつ、幸せなひと時でした。



ミサ後、バルで、カラマレスと呼ばれるイカのリング揚げと、トルティージャ(スペインオムレツ)を食べました。

帰り道、白服の日本人紳士に再会。再会を喜んでハグし合いました。サンチャゴまであと2日の出来事でした。

第11回へつづく



## サンチャゴ巡礼日記 11

2009年6月23日、日本を出発して13日目、巡礼11日目。朝、前日に購入したオレンジジュースを飲み、りんごを食べました。8時にホテルを出発。この日の巡礼路では、さまざまな美しい植物に出会いました。

鮮やかな赤とピンクのひだの重なりの間から、赤いめしべがするりと伸びた姿が、まるで可愛らしいスカートを履いた踊り子のような花。こんもりとした樹上に、藤に似た紫の花房が重そうに並んでいる樹木。もみの木の幼木が、軍人のように規律正しくえんえんと影を落とす静かな林。見上げて見上げて、やっとてっぺんが見える巨大なユーカリの木が、どこまでも続く巨木の森。

その森の中を18キロ歩いて、この日宿泊の地RUAに到着したのは13時でした。



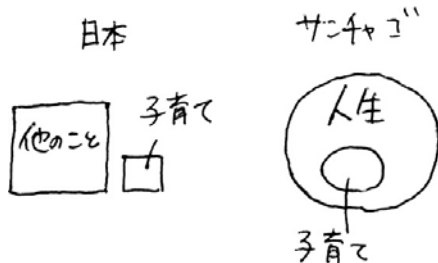
この日の宿は、今まで一番かわいいホテルでした。室内が、明るいブラウンと、クリーム色と、抑えたブルーでまとめられています。クッションもふかふかです！しかも2つも！！昼食後、シャワー、洗濯をして、そのふかふかのクッションを枕にお昼寝。最高に幸せでした。

起床後、階下に行くと、ドイツ人の紳士がホテルのパソコンを使っているところに行き会いました。少し話をしてから、夕食を食べるべく、宿舎の隣のおしゃれなレストランへ向かいました。このレストランのインテリアも素敵で、モスグリーンのカバーが掛けられた椅子には一脚一脚にオフホワイトの大きなリボンが結んであり、テーブルには同じモスグリーンのテーブルクロス、その上にオフホワイトのナプキンが並べることで、色が合わせてありました。





この宿は雰囲気もアットホームな感じで良かったです。職員たちが、自分の子どもや飼い犬を職場に連れて来て、一緒に過ごしていました。うらやましいかぎりです。子育ては人生において、不可欠で、当たり前。他のことと子育てが、別の枠で分けられているのではなく、人生という大きな円の中に子育てが包まれているような感じがしました。普通、人間はもともと動物なのですから、このような形が日本にもあっていいような気がするのですが…。しかし、それは、農業でもないかぎり、日本ではほとんどありえない光景のように思います。社会の複雑化の中で、日本はその姿を捨ててしまったのでしょうか。



23:59、部屋でずっと寝転んでいたのですが、やっと日が沈んだと思ったら、それと同時に銃声のような音がはっきりなしにし始めて、眠れなくなりました。ジェysonみたいな怖い人が出てきたらどうしようと、怖くなりました。00:27、今度はオカルト的な奇妙な音が外から聞こえてきて、部屋の外が妙に明るくなってきました。なぜ明るいのかすごく怖くて気になるのですが、見てしまうと、こっちの世界に戻って来られなくなるような気がして、怖くて見られません。エイリアンでも来ていたらどうでしょう!?



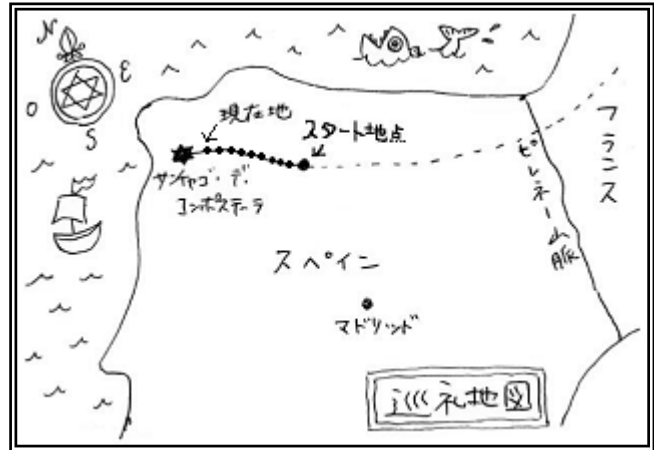
結局、真相を知らないままの方が怖いので、窓からそっと外を覗きました。外が明るいのは、なんのことはない、外灯のせいでした。変な音というの、窓際まで近寄ってみると、もう少しはっきりと聞こえ、なんだか楽しげな音楽のようです。お祭りかもしれない。そういえば、昨年行ったバーのおばちゃんが、そういったものが近々あるという話をしていたような気がします。でも、やっぱり、真夜中にかすれながら聞こえてくる楽しげなメロディーというのは、なんとも不気味なものでした。

00:39、勇気を出して宿の外に出てみました。曇っていて、星は見えません。女の人のひそひそ声が聞こえなくもないのですが、辺りは真っ暗闇でよくわかりません。一人きりでは、危ないので偵察はそこまでやめにし、部屋に戻りました。

部屋に戻ると、昨日買ってまだ食べかねていた桃を手に取りました。見た目が座布団よ

うに平べったいあの桃です。口にしてみると、見た目は全く違うのに、味は日本の桃とおんなじでした。人心地ついて、私はもう一度布団に入りました。いよいよ明日は、サンチャゴ・デ・コンポステーラに到着です。お楽しみに。

第12回へつづく



## サンチャゴ巡礼日記 12

2009年6月24日、日本を出発して14日目、巡礼12日目。7:30にRUAのホテル付属のバルで、朝食。8:30にホテル出発。道中ずっと曇りで大変歩きやすかったです。朝もやの中を歩きました。広い原っぱに差し掛かると、原っぱの向こう側はもやで滲み、全く見えなかったのです。

陽気なパーマのカナダ人と話しながら進み、前日宿が一緒だったアレックスさんと仲良くなりました。アレックスさんおじさんは横幅が私の二倍ある、恰幅のいいスペイン人のおじ様で、旅の思い出に黄色い矢印のピンバッチをくれました。昨日、私がさんざん怯えた物音は、やはりお祭りだったようで、ニュースでもサン・フアン(聖ヨハネ)祭と報道していました。RUAから2キロ離れた村でやっていたようです。“未知との遭遇”ではなかったようで一安心です。



そうこうしているうちに、喜びの丘、Monte do Gozo に到着。空飛ぶ法王ことヨハネ・パウロ 世を記念するモニュメントがカミーノの道なりの丘にあるのですが、本当の喜びの丘はここではありません。そこから少し離れた別の丘に、2体の巡礼者像が、サンチャゴの3つの塔を指差して立っています。モニュメントの丘からの眺めも聖地サンチャゴが標榜できて素晴らしいのですが、肝心のサンチャゴ大聖堂の塔が、

そこからでは木がじゃまして見えないのです。

近くの食堂で昼食をとり、サンチャゴへ向かって歩きだしました。喜びの丘を下りてしまうと、あとはすっかり街に入ってしまう。このときには、朝まで大自然の中を歩いてきたので、少しさみしい思いに駆られます。サンチャゴの街に入っても塔までが遠い。さびれた旧市街を通過して、ひたすら塔を目指しました。広場を通り過ぎ、トンネルをくぐると、とうとう、サンチャゴ大聖堂の正面扉にたどり着きました。



信じられません。この世にこんな建て物が存在するなんて！いつの間にか空は晴れ、青空を背景にサンチャゴ大聖堂の3基の塔がそびえ立っていました。私は、ローマの大聖堂を見たときも同じ気持ちを感じたことがあるのですが、このような巨大な建築物を目にしたときの感動を、言葉にするのは難しいものです。その存在が不思議すぎます。音楽家ならば歌を歌い、弁論



家ならば言葉を尽くして、称えたことでしょう。しかし、私はただの小娘ですから「うっわあ～、うっわあ～」と感嘆の声をあげるばかりでした。そこここで、大道芸人ならぬ、大道音楽家が不思議な楽器をかき鳴らしています。

毛糸の帽子を被った老人は、空色の絵で彩られた木琴で、軽やかなメロディーを奏で、スキンヘッドの若者は、銀の甲羅に、細い金属板を幾重にも渡したハープを幻想的に演奏しています。若者がその弦を弾くたびに、月の音色とでもいうしかない音色が拡がり、私たちに、ここが異国であることをひどく意識させるのでした。



異国の世界観に半ば酔いしれながら、門の前を通りすぎ、巡礼証明書をもらいに行きました。巡礼事務所は古い古い、暗い暗い建物です。そんな建物の中で、美人の受付嬢たちがスーツを着こなし、パソコンを打ち、電話する姿はなんだかちぐはぐで、はっきり記憶に残っています。そんな美人受付嬢とのやりとりを経て、巡礼証明書を受け取りました。私はカミーノ・デ・フランセス全 800 キロのうち、180 キロしか歩いていません。それでも、自分の足で歩きぬいたのかと思うと、感慨深いものがありました。教会の青年会のメンバーの一人が、世界を飛び回って暮らしたいと言っていた、その気持ちが、少しだけわかるような気がしました。

ホテルのチェックイン後、ツアーガイドさんのおごりで、みんなで乾杯をしました。巡礼中、体調も崩さず、ケガもせず、無事にここまでたどりつけて本当に良かった！日本の友人たちや、家族、マドリッドの古村さんや、ガイドさん、巡礼仲間の支えがなければ、決してここまで来ることはできなかったでしょう。

その日も、それからミサに出かけました。ミサはサンチャゴ大聖堂と、女子修道会のミサ、二つに出ました。サンチャゴ大聖堂は金ぴかでなんだか落ち着きませんでしたが、女子修道会のミサは、修道女たちの美しい賛美歌と、オルガン演奏があり、この世のものとは思えない素晴らしいものでした。この街で、ぶちさん、以



前のホテルで一緒になった老夫婦、ミサで出会った紳士、白服のおじさんら日本人に再会し、そして、今日出会ったカナダ人、ドイツ人のおば様たちを始めとしたたくさんの人に再び会うことができました。

この日の夕食は、近代的なバルで、ピンチョスというつまみと、トルティージャ(スペインオムレツ)を食べました。ピンチョスというのは、とても自由な食べ物で、薄く切ったバゲットの上に、さまざまな具材を重ね、それらが落ちないように楊枝などで刺し止めた物です。私がこの日食べたピンチョスは、薄切りジャガイモの上に、タラを乗せ、みじん切りして炒めた玉ねぎのトマトソースをたっぷりとかけたもので、なかなか見た目も華やかなご馳走でした。

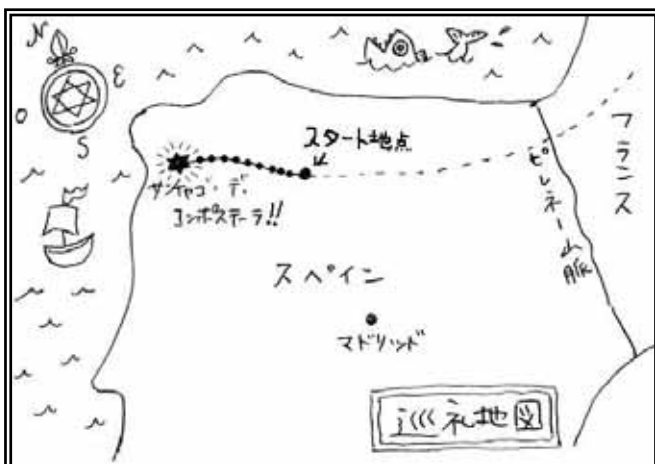


おしゃれなお店で美味しいものを食べ、大満足でホテルに帰還。このホテルの部屋は、小じんまりとしていて、しかも最上階のため天窓が付いていました。物語の世界の屋根裏部屋のように、私はとても気に入っていました。天窓を開けて、椅子に乗り、外をのぞいてみると、赤褐色の屋根がどこまでも続く、サンチャゴ・デ・コンポステーラの町並みが広がっていました。すぐ目の前を大きなカモメが斜めに飛んでいきます。海が近いのです。夜が近づき、外気が冷たくなってきたので、椅子からおり、天窓を閉めました。



この夜、持ち物の整理をしました。軍手も、洗濯ばさみも、靴下も、Tシャツも、ズボンも、この瞬間のために捨てるでもいい物を持ってきました。180キロの徒歩の旅のあいだ、共に過ごし、お世話になった物たちを捨てるのは、名残惜しい気持ちと、さっぱりとした気持ちがない交ぜになった複雑なものでした。

明日は一日サンチャゴで過ごします。どんな素晴らしい出会いがあるのでしょうか？なんにしろ、もう歩かなくてもいいのです。私は、ゆっくりと眠りにつきました。



第13回へつづく

## サンチャゴ巡礼日記 13

2009年6月25日、日本を出発して15日目、巡礼13日目。朝、9時半集合で市場を見に出かけました。大きなレンガ造りの建物に、三本のトンネルが通っています。その一本一本の中が、商店街のようになっていて、様々な店が軒を連ねていました。

食べ物ならなんでもあります。美しい色合いの野菜、果物、花、ワイン。タライほど大きな焼きたてパンの隣には山積みのチーズ。四角く仕切られた棚には、白ばかり、幾種類もの豆が輝いています。肉屋では、巨大な豚足、皮をむかれた艶かしいウサギ、顔の付いたままの鶏が並び、その向かいの魚屋では、マテ貝、赤貝、ホタテ貝、怖い顔のカマスが歯をむき出し、手長エビが手を揃え、タラが大きな目で、こちらを見つめています。市場って、エネルギーに溢れているような気がします。ハチミツを二瓶、お土産に買って帰りました(このハチミツは、私の母がカステラにして去年の池田教会のバザーで販売したので、口にされた方もいらっしやることと思います)。

昼食は、祝サンチャゴ到着ということで、ちょっと高級なお店で、焼いたホタテ貝と、赤貝。それと、パプリカで香りと色をつけた絶品の海鮮リゾットをいただきました。これはさすがに家では真似ができません。素晴らしいプロの味でした。

その後、12時からサンチャゴ大聖堂でミサだったのですが、この日は特別なミサなので、30分前に聖堂に入って席を取りました。

12時すぎ、ミサが始まりました。大司教が祈りを捧げ、聖体拝領が終わると、4人のプラザーが大きな綱に手をかけました。人々がみな席を立ち、カメラを取り出し、期待に目が輝きます。女子修道会のシスターの一人が教壇に立ち、賛美歌を歌い始めました。それと同時に、プラザーたちが綱を大きく引きます。すると、大聖堂の中心に据えられた、巨大な香炉が揺れ出しました。ゆっくりゆっくり、そして、大きく香炉が揺れて、白煙が長く尾を引いて、大聖堂になびきます。そこに、シスターのこの世のものとは思えない美しい歌声が響き、長い旅を終えた旅人たちの目には、聖地にたどり着けた実感で涙がにじみました。素晴らしいミサでした。

この香炉はボタフメロといいます。昔は、今のようにお風呂がありませんでしたから、



長い旅で汚れた巡礼者たちを一気に清める意味があったようです。実はこのポタフメロは、毎日見られるわけではありません。決まった祭日か、団体巡礼者がお金を出してお願いしたときのみ、行われるのです。私たちは、2日間しかサンチャゴにいませんでしたから、ポタフメロが見られたのは本当に幸運でした。

ミサ後、大聖堂のカテドラルのお土産コーナーで、ジャムやピアス、チョコレートなどのお土産を買いました。ホテルに戻って一時休憩した後、今度は、19:00 から、女子修道会のミサに参加しに出かけました。

女子修道会の教会には、祭壇と、一般信者の座席を隔てる柵があります。低い柵ですが、シスターたちはそこから一步も出てきません。祭壇奥の扉から、しずしずと40人ばかりのシスターたちが現れて、ミサが終われば、またその扉の奥へと、静かに消えていくのです。修道院に入るということは、俗世での暮らしを捨てることなのだ実感します。よく見れば、私より若い修道女も幾人かいます。あの小鹿のような足をした、まだ少女を卒業したばかりといえるような女性は、一生を祈りに捧げる生涯を選んだのです。その志はなんと尊く、彼女にそれを選ばせた神はなんと偉大なことでしょう。

この日はミサ三昧の一日でした。21:00からは、サンチャゴ大聖堂の一角で行われる巡礼者のためのミサに参加。

ミサを執り行ってくださった司教様は、私より背の低い小さな老司祭様で、その表情は明るく、目がユーモアできらきらしていました。その隣には、大変落ち着いた物腰の、

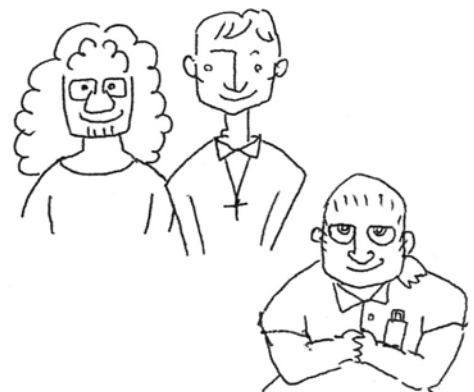
見上げるように長身の壮年の司祭様が、補佐役としてぴったりとくっついていて、なんとも対照的な二人組なのでした。ミサに参加した巡礼者は15名ほど。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツなど、様々な国から巡礼にやってきた人達でした。



まず、司祭様の指示の下、長いすを移動して円を作りました。その後、英語と、スペイン語の聖歌と典礼の小冊子が配られ、どこの国から来たのか簡単に自己紹介。それから、巡礼路を歩いていて感じたことを英語やスペイン語で話し合いました。

私の向かいに座っていた3人の男性の顔ぶれがおもしろくて、向かって左のメガネの男性はアメリカ人。大きな鼻、縮れた黒髪の人で、いかにもラテンの血が流れていそうな人でした。その隣に座った黒シャツの男性は、イギリス人。立派なワシ鼻の人で、つぶらな瞳は、ガラス玉のように薄いグリーンで、隣の男性の肉付きのいい様子とは対照的に、その姿は、彼自身の胸に掛かった十字架のそれと同じに、すらりと縦長でした。

しかし、なんと言っても、右端に座った男性が最も印象深かったです。プラット・ピットと角田信明(格闘家)とメガネカイマン(ワニの1種)を足して、3で割ってみてください。そんな見た目の人でした。赤いポロシャツのポケットにメガネを入れた彼は、後ろで



まとめられた髪は金髪で顔立ちはスラブ系といったところですが、肌は日に焼けすぎて褐色です。背が高く筋肉隆々。眉毛のない深い深い彫の下の彼の目は、その深さを感じさせないほどに大きく、力に満ちて、全てを見透かすようでした。そんな彼ですが、アメリカの家には奥さんと5人の子どもたちが待っているそうで、帰ったら大変だと笑っていました。お父さんが何日もサンチャゴ巡礼に出ている、5人の子どもを養えるとはうらやましいかぎりです。

さてさて、人間観察はこの辺にして、サンチャゴの街に戻りましょう。ミサが終わって外に出てみると、しとしとと雨が降り始めていました。この旅で初めての本格的な雨でした。カテドラルの向かいの、石造りの通路の下で雨宿りして、日暮れを待ち、サンチャゴ大聖堂のカテドラルのライトアップを見ました。昼間、青空を背景に雄大にそびえる姿を観るのも素晴らしいですが、夜になり、紺碧の空を背景に、壁面の照明や渡り廊下に灯りが灯り、その光が、石畳に流れ映る様子もまた華やかで素晴らしいものです。

カテドラルを真正面に臨みながらの雨宿り中、若い日本人男性と知り合いになりました。仕事で貯めたお金で世界を回る旅の途中で、スペインに来る前はモロッコにいたそうです。モロッコは日本で一般にイメージされているより安全な国のようです。日本人の女の子を何人も見かけたと言っていました。今まで行った国の中で南米が一番面白かったと、屋台の立ち並ぶきらきらした夜の写真を見せてくれ、出会った人達の話、これから行きたい所の話など、ライトが灯るまでにたくさんのお話を聴かせてくれました。これもまた、素晴らしい時間でした。



夕食の時間が近づいてきたので、その人とお別れし、レストランへ向かいました。レストランへ向かう途中、なんと、一昨日出会い、黄色い矢印のピンバッジをくれたアレックスサンドロさんと再会！アレックスサンドロさんとは一緒に記念撮影をするくらい仲良くなっていたので、本当にうれしくて、心を込めてハグしました。もちろん私達は言葉は通じないのですが(笑)。

レストランでは、マテ貝とタコと、ケーキを食べました。この日はサンチャゴ最後の日ですから、お酒の弱い私も特別にクリームコーヒーの甘いお酒をいただきました。0:30、密度の濃いサンチャゴでの一日が終わり、ようやくホテルの部屋に戻りました。

私の巡礼も終わりました。明日はサンチャゴを離れます。そして、一年間お付き合い頂いた、このサンチャゴ巡礼日記もとうとう次回が最後の連載です。それでは皆様、来月をお楽しみに！



## サンチャゴ巡礼日記 14 (番外トレド編)

折角の巡礼日記ですから、私が行ったスペインの他の大聖堂のことも書こうと思います。2009年6月26日、日本を出発して16日目。14日間の巡礼を終えた私は飛行機に乗り、首都マドリッドに戻りました。飛行機が離陸すると、窓からは、広い牧草地がミステリーサークルのような幾何学模様を呈しているのが見えました。

二時間もすると私たちは、マドリッドの、巡礼ツアーを主催している古村さん宅へ到着。私はそこで、ゲストハウスに宿泊中の北海道出身の女の子と知り合いになり、特にその後の予定が決まっていなかったことから、その子とスペインの旧首都トレドに観光に出かけることになりました。

と、いうわけで、2009年6月27日、私は、巡礼から帰ってきて早々、朝9時集合で長距離バスに乗り、トレドを目指していました。バスを乗り継ぎ、トレドに着いたのは12:30でした。本当はもうちょっと早く着く予定だったのですが、私たちが二人揃って方向音痴の乗り換え音痴だったので、道に迷い、バスを間違えたため、長距離バスに乗るまでに時間を食ってしまったのでした。

さて、トレドという街は日本でいうと京都か奈良といったところですよ。スペインの昔の都で、巨大な堀に街全体が囲まれています。まず、私たちはタクシーに乗り、サン・ファン聖堂に行きました。同伴の女の子は聖堂に入るの自体が生まれて初めてだったので、彫刻にも祭壇にも、天井が高いことにも驚いているのが初々しくて可愛らしかったです。

聖堂を出ると、東へ歩き、トレドの大聖堂カテドラルを目指しました。途中のレストランのオープンテラスで、ハムカツとガスパチョを食べました。このガスパチョが美味しかった！ガスパチョはお酢の入った冷たいスープで、好き嫌いの分かれる食べ物なのですが、野菜たっぷりです。体に沁みるので、私は大好きです。トマト、キュウリ、パプリカなどの好きな野菜、ニンニク、オリーブオイル、ワインビネガー、塩をミキサーにかけるだけなので、簡単にできます。皆さんもぜひご賞味あれ。



随分歩いたところで、カテドラルにたどり着きました。

すごい！すらっと高くそびえる塔は圧巻です。向かいのカテドラルショップで入場券を買い、中に入りました。

これはすごい！

巨大。巨大な空間がそこに広がっていました。

天井は、高いというより遠い。

そして、バラ窓が、それはそれは素晴らしかった。形の構成が緻密で、色は鮮やか。そ



の鮮やかさといったら、光が産み出す色の内で、最も生きが良く美しい色だけが選ばれて、そこに存在するかのようでした。昔は、このように鮮やかな色彩は、庶民の生活の中にあまりなかったのではないのでしょうか。だとすれば、このバラ窓の美しさは、信徒に畏敬の念を呼び起こすのに十分なものだったことでしょう。

私たちは巨大な聖堂の中を何度も何度もくるくると隈なく観て回りました。カテドラルには、いくつもの彫刻も安置されています。そのうちのいくつかは、美しい聖女たちです。説明の札がありませんが、白い大理石で作られた髑髏を抱えた聖女が印象的でした。マグダラのマリアでしょうか。

名残惜しい気持ちを抱えつつ、聖女に別れを告げてカテドラルを出ると、私たちは、トレドの街を外側からぐるりと巡る周遊トレインに乗りました。周遊トレインは、半分くらい来たところで、トレドの街を一望できるところに出ます。その眺めがまた素晴らしかったです。人間というのは集まると、なんとも壮観な景観を作り出すものようです。しかし、その感動もトレインが駅に戻るまでもたず、すっかり旅疲れた私たちは、二人揃ってうたた寝してしまい、他の観光客に笑われてしまいました。こうしてきいちゃいとトレドを堪能した私たちはマドリッドに戻り、夜は古村さんに飲み連れてってもらって大満足の日を過ごしたのです。



このあとも、アラビア風のバーで水煙草をふかしてみたり、プラド美術館でベラスケスの「ラス・メニーナス」に出会ったり、独りでマドリッドの街にショッピングに出かけ、地下鉄に一日7回も乗ったり降りたりして、私の冒険は続きます。けれども、それは、また別の話。大切なことは、私の巡礼の旅は無事に終わり、日本に帰って来られたことです。

2009年7月1日、お土産を入れるためにマドリッドの中国人雑貨店で買い足した、大きなスーツケースを引いて、私は関西国際空港に戻ってきました。空港には、友人が迎えに来てくれていて、それがどんなにうれしかったことか！

さあ、一年二ヶ月連載されたサンチャゴ巡礼日記も今日でお別れです。長い間、お付き合いくださった皆様ありがとうございました。

最後に、初めは、無理にでも三回程度に短くまとめるつもりだったものを、長期で連載することを許可してくださり、不慣れな編集を根気よく指導し、励ましてくださった広報の皆様方、私のわがままを心配しながらも送り出してくれた家族、そして、旅の訓練に付き合い、準備を手伝い支えてくれた友人たちに、改めてお礼を述べたいと思います。ありがとうございました。

皆様にもサンチャゴのお恵みがありますように！

